

防災・復興教育に期待すること

講 師 鳴門教育大学教職大学院
教 授 村 川 雅 弘

1 はじめに～3つの声～

私の防災教育との関わりは、昭和58年の日本海中部地震からです。その翌年の長野県西部地震にも関わり、教材開発や防災体制アンケートに取り組みました。平成7年の阪神淡路大震災では、防災教育のカリキュラムや副読本の作成に関わりました。



この3つの震災で印象に残っているものを簡単に「3つの声」という形でまとめます。1つめは「教師の声」です。長野県西部地震の時の小学1年生の女の子の話です。大きな揺れが来てものすごく怖かった時に、先生がとても落ち着いて「大丈夫だよ。」とたった一言言ってくれた声が神様のように聞こえたということがありました。教師の一言で子どもたちは落ち着いて次の行動に移っていくことができるということを感じました。

2つめは「子どもの声」です。これも長野県西部地震の時のある校長先生の話です。学校がしばらく休校になったため、子どもたちを安全なところに疎開させたそうです。しかし、町から子どもの姿がなくなったら、急に大人たちの元気がなくなったそうです。それを見ていた校長が、予定よりも早く学校を開校したそうです。

そして、子どもたちが戻ってきたら、その元気な声で大人たちががんばろうという気持ちになったという話です。「子どもの声」、元気な姿というのは地域や大人を元気にするのだと改めて感じました。

3つめは「身近な生活情報」です。これは、阪神淡路大震災の時のある避難所での話です。そこで避難生活をしている方々に毎日配られる食事の包み紙が新聞になっていて、今度いつ風呂に入れるのか、次にどんなものが支給としてもらえるのかといった生活情報や自衛隊の方の想いについて書かかれていたんです。誰が書いていたかということ、小・中学生が新聞記者になって、取材をし、そして食事の時に配っていた。そのような活動が行われていたことが印象に残っています。

2 育成すべき資質・能力の扱い

実は、次期学習指導要領に向けて議論されています。キーワードは、「育成すべき資質・能力」です。世界と我が国は、一言で言えばスキル、別の言い方をすれば資質・能力が重視されてきています。教科の学力を越えて、本当に生きて働く力を育てるのが学校教育であり、そのことに立ち返ろうというのが、次の学習指導要領で求められると考えます。なぜそのようなことが言えるかというと、「生きる力」が平成20年の1月に中教審答申で出されました。これが今回の指導要領の改訂に影響を与えています。文部科学省の研究開発学校では、スキル重視の研究をテーマに新しい教科を設けている学校がたくさんあります。

子どもに付けたい力は、たくさんありますが、

付けたい力ごとに教科を作ったら、全部細分化されて、受け身的な学びになるのではないかと心配しています。

世界的にもスキル重視の方向です。ご存じのように「キー・コンピテンシー」という概念が、今回の指導要領改訂のベースになっています。カテゴリー1の「相互作用的に道具を用いる」というのは、様々な問題解決をする時、自分の持っている知識や技能を最大限つなぎ合わせて活用し、違うと思ったら差し替えたり入れ替えたりする力です。カテゴリー2の「異質な集団で交流する」というのは、他人とよい関係を作る能力、協力する能力、争いを処理し解決する能力です。カテゴリー3の「自律的に活動する」というのは、しっかり展望を持つ、きちんと計画を立てる、自分の権利、要望、限界を人に言える能力です。このような力が今世界で求められています。これらの力は、皆さんも「大人にとっても必要なもの」と感じられると思います。

これらことは、総合的な学習の時間の指導資料の68～69ページに書かれていて、「キー・コンピテンシー」と総合的な学習の時間で育むべき力、育んできた力は3つとも重なるということが明記されています。今日の5校の発表も、多くは総合的な学習の時間を使っていました。結局は、総合的な学習の時間で子どもたちに付けていく力というのは、ここでいう「キー・コンピテンシー」、つまり、問題解決力、人とうまくやっていく力、自律的に活動する力であると理解できます。このようなことから、教科を越えて、これからの将来を担う子どもたちにどんな力を付けていかななくてはいけないかということが大きなテーマとなります。

3 多様な教育課題の取り扱い

「〇〇教育」があまりにも多すぎます。学校現場では、「〇〇教育」ごとに校務分掌があります。そして、それをもとに全体計画を作っています。私の考えでは、「〇〇教育」を全部やろうと思っても、あまりにも多いので無理です。

実は、環境、健康、防災等に関することは各教科に入っているんです。本当に国民にとって必要な「〇〇教育」に必要な知識や技能は、各教科の中に入っているということを明確に示すべきであると考えます。

もう一つ大事なことは、これからの子どもたちが遭遇するような新たな課題が、今の世の中には語られていないことがあるかもしれません。結局は、新しく遭遇した問題に対してどれだけ対処できるかということが、これからの子どもたちに求められます。そこで、総合学習をとっても大切に考えているわけです。今回の学習指導要領で、総合的な学習の時間が減りました。減ったから逆に内容をもっと絞ったらいいいと思います。1年間1単元でいいと考えます。子どもたちは、関わりの中で学んでいきます。総合学習では、子どもたちができるだけ体験を踏める学習がよいと思います。そのためには、子どもたちにとって身近な体験を取り上げるべきだと考えます。地域の課題を取り上げるメリットは、多くの体験を積めるということです。その課題に関わっている人がたくさんいるということです。多様な人たちと関わって、真剣な議論を行い、子どもたちが学んだことを地域にも返していく。様々な課題の中からテーマを絞り、じっくり関わることによって、将来において新たな課題が出た時に対応できる力を培っていくことができるのです。教科の学習で関連付けたり、意味付けたりし、総合学習で、地域が抱える課題についてじっくり取り組む。このバランスによって、「〇〇教育」に対応できる子どもを育てることができるということを提唱したいと思います。実際、「〇〇教育」対応の研究開発学校もたくさんあるのですが、「〇〇教育」ごとにまた教科を作るのかということです。それでは、全部週1時間のような教科がたくさん並んでしまい、座学だけ、受け身形の授業になってしまいます。そういう学びの末には、子どもが問題に出会った時に対応する力は育ちません。

4 未来を築く学び手に求められる力

未来を築く子どもたちにどんな力を育てなければならぬかと考えると、直面する様々な課題に対処し解決する力が必要です。解決は一人ではできないので、いろいろな世代や立場の方とつながって初めてできるわけです。そのような経験を今からやっておくとよいと思います。今日の5つの発表も、多かれ少なかれそういう取組だったと思います。既存の知識や技能を基盤に新たな知識や技能を自ら獲得する力も大事です。地域や社会に貢献する力、働くことへの興味・関心・期待というものを、教科の学力とともにきちんと育てていくということが今求められていると思います。



5 総合的な学習と学力向上

よく総合学習をがんばると学力が落ちるという話があります。皆さんも防災教育をがんばっていると学力がどうなるかと心配されている方もいるかもしれません。しかし、総合学習の研究指定校では、全国学力調査の結果が右肩上がりです。特にB問題がとて高くなっています。なぜかという、B問題というのはPISAの学力調査に近い問題です。PISAの学力調査の問題のベースになっている「キー・コンピテンシー」と同じ学力観が総合的な学習なわけですから、子どもたちの学力が上がっていくのは当然の結果だと思います。

総合的な学習に取り組むことで、教科の学力が向上する例をもう一つ紹介します。子どもたちが総合的な学習で防災教育や復興教育で、地

域のひと・もの・ことに主体的に継続的に関わります。すると、子どもたちは、それを守りたいと思うわけです。だから、守るためには何とかしたいと思い始め、もっと深く知りたい、もっと調べないといけないと考えるようになるわけです。もっと知って、もっと調べたらどうなるかという、子どもたちは、人にうまく伝えたいと考えるようになります。このような学びを繰り返した時に、子どもたちは、自信・自尊心、そして、挑戦意欲が湧いてくるわけです。豊かな体験、表現意欲、表現内容、表現技能、自信・新たな挑戦意欲という一連の子どもたちの学びの中で、その学びを支えているのは教科の学力です。特に、国語の力、言語力です。調べたり、まとめたり、伝えたりすることは、全部言語活動です。教科の学力が関連するということになります。やはり、子どもたちの学びを伸ばしていくのは、必然性だと思います。知りたい、調べたい、伝えたいという欲求をかなえるためには、教科の知識や技能を活用せざるを得ない、活用したくなるという学びの必然性をきちんと保証することが、この防災・復興教育においても大事だと思います。教科で身に付けた知識や技能をきちんと使えるようにすることによって、子どもたちは、その防災・復興教育で取り組んだことが、価値があるものになり、成果物としてもよりよいものになります。人に伝えるためにまとめることができたという自信が、子どもたちの次の挑戦意欲につながりますし、教科の力は役に立つということにもつながっていきます。そういう学びの必然性とともにもう一つ大切なのは、学びの関連です。復興、防災ということを教科の学習とどうつなぐかということがとても大事になってきます。

6 何のために学ぶのか

「キー・コンピテンシー」の指摘の中にもう一つ重要な指摘があります。「私たちは何のために学ぶのか」という問いの答えに、自分の人生の成功と正常に機能する社会への貢献があり

ます。学んだ力を生かして、社会に貢献することが求められているのです。社会に貢献することによる真の自己実現が求められています。今日の5つの発表は、すべて子どもたちがボランティア的な活動をしていましたし、いろいろ社会に貢献するような活動もしていました。その中で子どもたちが自信を育てていった姿がよく見えたわけです。特に防災・復興教育もそうですが、広い意味で総合的な学習は、社会への貢献がキーワードになると考えます。

7 異能者集団のチームワーキング

教科というのは日本全国同じものを学んでいて、生きていくうえで共通に必要な技能や知識を学んでいます。だから、他の人の考えがわかるわけです。大切なことは、必要になった時に、総合学習でそれぞれが学んだ異なることを出し合い、認め合い、生かし合う関係作りです。そのためにも、総合学習というのは中途半端な学びであってははいけません。「〇〇教育」を全部やることはできないから、その学校で絞っていかないなりません。そして、自分が取り組んだ「〇〇教育」については、人に熱く語れるくらいになってほしいです。すると、10人の人間がいれば、それぞれが防災教育、省エネ教育、健康教育等をきちんと学び、教科で身に付けた知識や技能を使って理解し合い、お互いの持っているものを生かし合うことができます。多様な知識や技能をきちんと持った人が、ともに助け合って世の中をうまく動かしていくために、学んだことをきちんと人に伝えられるといいと思います。

異なる知識や技能を身に付けた者が、互いに理解し、協力し合って様々な問題解決を図っていく「異能者集団のチームワーキング」が重要です。

8 おわりに～岩手県の取組への期待～

今回皆さんは大きな被害を受けて、その中で改めて様々な知識や技能が必要だということに

気付きました。これらを子どもたちの中で育てていくためには教育課程全体で育てていくべき問題です。各教科でも扱ってきたと思いますし、総合的な学習の時間が核になるかもしれません。それから、日常的な安心・安全教育を改めて見直すことも必要です。そして、これらの取組は、家庭や地域との連携なしにはうまくいきません。しかし、これらのことを各学校だけでやるのは無理ですので、共通の基盤づくりは、岩手県教育委員会にしっかりやってほしいと思います。実践事例集や副読本についても、岩手県として作成しています。県が作ったものをうまく活用しながら、学校規模や学校種ごとの違いに配慮して各学校でカリキュラムマネジメントをしてください。学校の実態に基づいて、どのようなカリキュラムを作っていくのかということ、各学校で取り組んでほしいと思います。

私は、「教育は地上の星の卵を育てる壮大なプロジェクト」であると考えます。今日のように岩手県の教育に関してたくさんの方が集まって話をしているということはすごいことです。そこに、私も関わっている、地域の方も関わっているという壮大なプロジェクトなのです。私が岩手県に期待していることは、復興教育・防災教育だけにとどまらず、それを生かして資質・能力をどう育てていくか。そして、どんな時代になろうと、力を発揮して一問題解決のために手を取り合って一協力してやっていける真に生きる力を身に付けた「岩手ブランド」の人材を育ててほしいということです。例えば、「君はどこ出身ですか。」「岩手県です。」「ああ、だからしっかりしているのか。」というように、将来どこに行こうとも、どこに就職しようとも、「岩手県出身の子どもは違う。」と言ってもらえるようになってほしいです。このように、様々な問題を自分たちで協力しながら解決できる力を持った人材が、岩手県から育てていくような教育を、この復興教育・防災教育をきっかけにやってもらいたいと思います。大変期待しています。ありがとうございました。